様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３７５０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２５４

研究課題名（和文）「もう一つの精神史――ハーン受容にみる近・現代日本」

研究課題名（英文）Reading Lafcadio: Hidden History of Modern Japan

研究代表者
アスキュー　里枝（ASKEW, Rie）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・講師

研究者番号：１０５９９６３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクト「もう一つの精神史」の目的は、明治以来、来日した外国人の中でももっとも日本の心をよく理解したとされるラフカディオ・ハーンこと小泉八雲の日本における受容・表象のあり方を検証し、近・現代日本の隠れた精神史を明らかにすることにあった。この目的は大体果たせたのではないかと思う。具体的な研究成果としては、期間内にテーマに関する論文を三本書き上げ、そのうちの一本はニュージーランドの査読付き学術誌に掲載された（"The Politics of Nostalgia in Vestiges of Japan", NZAS, 2012)。残りの二本は査読付き学術誌での掲載に向けて準備中である。

研究成果の概要（英文）：This project "Reading Lafcadio" analysed the various Japanese receptions of the man of letters, Lafcadio Hearn, who is popularly known in Japan by his Japanese name, Koizumi Yakumo, and who has been often depicted as Japan's best foreign interpreter. This project focused on the Japanese receptions of Hearn and in particular on how Hearn's name has been mobilised in the modern Japanese discourses on nationalism and identity, and thus attempted to clarify the hidden aspect of modern Japanese history. Overall, things went as I planned. I have written three papers concerning this theme and published one from a refereed journal so far. (See "The Politics of Nostalgia in Vestiges of Japan", NZAS, 2012). I am currently working on another two for publication in refereed journals.

研究分野：日本文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン　小泉八雲　アイデンティティ　ナショナリズム　文化喪失

１．研究開始当初の背景

それまでのハーン研究では、ハーン研究者による作品・作家論が主流であり、ハーンの受容に関する研究は、殆ど全く行われてこなかった。日本における代表的な研究として『世界の中のラフカディオ・ハーン』（1994）や『ラフカディオ・ハーン――植民地化、キリスト教化、文明開化』（2004）など、平川祐弘による一連の著作が挙げられる。今日、ハーンは海外では余り知られていないが、平川は少数の外国人・海外研究者のハーン論を編集し、*Rediscovering Lafcadio Hearn: Japanese Legends, Life and Culture*（1997）や *Lafcadio Hearn in International Persepctive*（2007）を出版している。しかしこれらはハーン研究として有益で興味深いものではあっても、作品・作家論の域を出ていない。ハーンの受容に関するこれまでの考察は、せいぜいハーンと日本人作家（夏目漱石など）との類似性や文学的影響といった、狭い意味での受容に限られていた。研究代表者は従来、日本におけるハーン人気は、単なる一作家の人気に留まらず、そこにはより大きく深刻な社会学的意味があると考えてきた。というのも、各々のハーン言説が語るのは、ハーンというよりも日本であり、明治以来のアイデンティティの問題、近代化による文化喪失の問題だからである。この点は見過ごされてきた。管見の限り唯一の例外は、福間良明による研究(『辺境に映る日本――ナショナリズムの融解と再構築』[2003]参照）であり、これはハーン研究者による言説とナショナリズムとの関わりを論じている。しかしこの研究の限界は、分析対象をハーン研究者に絞ったため、日本におけるハーン受容の広範な意味や衝撃が映し出されていない点にある。そこで本研究では、より総合的・包括的なハーン受容の検証を実現するため、ハーン研究とは直接関係のない知識人の言説やポピュラー・カルチャーの表象をも分析することで、ハーン受容と近・現代日本のナショナリズムやアイデンティティの深い関わりが明らかになるはずだと考えた。

研究代表者のプロジェクト開始当初の背景としては、それまで海外の大学においてハーン研究を行ってきた。その成果は “Lafcadio Hearn and Three Roads to National Survival”（*NZAS*, 2006）、“The Politics of Nostaligia: Museum Representations of Lafcadio Hearn in Japan”（*Museum and Society*, 2007）、そして “The Critical Reception of Lafcadio Hearn outside Japan”（*NZAS*, 2009）などの形で英語圏の学術誌において公にしている。研究代表者の一貫した研究テーマは、近代化に伴う日本の文化喪失感・精神的危機の問題であり、それは 2004 年に発表した論文、“Cultural Paradox of Modern Japan: Japan and Its Three Others”（*NZAS*, 2004）で最も直接的・理論的に論じており、ハーン研究も同様の視点から行ってきた。本研究はその総まとめ的な仕事となる。

２．研究の目的

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、日本の良き理解者として、明治以来日本人に愛されてきた（その圧倒的な名声は日本通の外国人を「第二のハーン」と呼ぶことにも表れている)。本研究プロジェクトでは、従来の研究を踏まえ、カルチュラル・スタディーズの方法論を用いつつ、日本におけるハーンの受容とナショナリズム、アイデンティティの問題との関わりを明らかにすることを目的とした。その際、いわゆるハーン研究者による狭い意味でのハーン論のみならず、一般知識人・批評家による言説や、ポピュラー・カルチャー（メディア、記念館など）における表象を分析対象とし

た。そして、より総合的なハーン受容を検証することにより、日本近・現代の精神史の新たな一側面を明らかにすることを目標とした。

３．研究の方法

本研究では､研究対象を三つに大別して、（一）ハーン研究者のハーン論、(二)ハーン研究とは直接関係のない学者･知識人（古くは岡倉天心、柳田国男から最近では長尾龍一、梅原猛、小堀桂一郎、鶴見俊輔など）のハーン言説、（三）ポピュラー・カルチャーにおけるハーン表象に分類し、各年度ごとにそれぞれの資料収集、分析を行った。研究方法はカルチュラル・スタディーズの方法論を用いつつ、日本におけるハーンの受容にみられるナショナリズム、アイデンティティの問題を明らかにし、ハーンの受容に表れた、新たな日本近・現代精神史を提示した。

ハーン研究者の著作収集は、数は膨大だが、ハーンの名前が本や論文のタイトルに入っているので必要な資料の確認は相対的に簡単であった。これに比べて学者・知識人（非ハーン研究者）の資料収集は数も多い上､確認作業もそれ程簡単ではなかった。というのも、研究代表者は彼らのハーンに直接触れた著作（論文も含む）は勿論、本来ハーン論の対象とされないテキスト、つまりハーンと直接関係のない著作に表れたハーン観をも分析の対象としたからである。しかし、これにはある程度の目途をつけることは出来た。まず、ハーン研究者である速川和男がハーンに触れている文献のリスト――完全ではないが、百科事典におけるハーンの記載など、かなり多くを網羅している――を作っていて、それを参考にすることによりある程度効率的に作業を行うことができた。また、日本人論、日本精神史、お雇い外国人、神道などに関する著作にしばしばハーン言説――中には二、三行に過ぎないものもあれば、一章を割いているものもある――が登場するので、そうした文献に絞って探し出し、分析した。

ポピュラー・カルチャーにおけるハーン表象は、具体的には、ハーンに関するテレビのドラマ・シリーズ（一九八〇年代に人気を博した山田太一のＴＶドラマ『日本の面影』)、やミュージカル､『サライ』などの一般雑誌（非学術雑誌）における特集号などといった資料を収集し、その内容を分析した。また、小泉八雲記念館（松江、熊本、焼津の三か所にある）を実際に訪ね、そこでのハーン表象（展示物、コメント、パンフレット、館内ビデオの内容など）をテキストとして分析した。

４．研究成果

本研究の意義は、ナショナリズムと研究者のハーン論の関係を論じた先行研究を補い、分析対象をハーン研究とは直接関係のない知識人の言説や、ポピュラー・カルチャーにおける表象にまで広げて検証することにより、より広範なハーン受容を浮き彫りにすることにあった。研究は概ね順調に進行したといえる。研究成果としては、三年間で三本の論文を書くことを目標としていたが、これも概ね予定通りに進行し、研究期間内にハーンに直接関する論文を三本書き上げた。このうちの一本はニュージーランドの査読付き学術雑誌から“The Politics of Nostalgia in *Vestiges of Japan*: Yamada Taichi’s Representation of Lafcadio Hearn”, *NZAS* (2012) としてすでに出版されている。あとの二本は日本におけるハーン受容の全体像をまとめたもので、査読付き学術雑誌での掲載に向けて現在準備中である。また研究期間内に、ハーンと直接関係はないが、テーマとして関連のあるノスタルジアや文化喪失に関する論文や書評

（たとえば遠藤周作の日本人としてアイデンティティとキリスト教徒としての矛盾を論じた論文“Can a ‘Maternal’ Catholicism be a Christianity? : The Issue of Inculturation in *Silence*” (*Asia Pacific World*, 2014) や宮崎駿の文化喪失をテーマとしたアニメを論じた映画評 “Film review of Miyazaki Gorô, *Kokuriko zaka kara (*From the Red Poppy Hill)” (*Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, 2013) を計七本発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

1. Rie Kido Askew, “Book review of Roger Scruton, *Notes from Underground* (New York: Beaufort Books, 2014), *Ritsumeikan bungaku*, no. 640, December 2014, pp. 26-30 (査読有).

2. Rie Kido Askew, “Film review of Miyazaki Hayao, *Kaze tachinu* (Wind Rises)” (Studio Gibli, 2013), *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, vol. 14, issue 3, December 2014 (査読無).

3. Rie Kido Askew, “Can a ‘Maternal’ Catholicism be a Christianity?: The Issue of Inculuration in *Silence*”, *Asia Pacific World*, vol. 5, no. 1, Spring 2014, pp. 68-91 (査読有).

4. Rie Kido Askew, “Book review of John Doughill, *In Search of Japan's Hidden Christians: A Story of Suppression, Secrecy and Survival* (Tokyo: Tuttle Publishing, 2012)”, *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, vol.13, issue 3, October 2013 (査読無).

5. Rie Kido Askew, “Film review of Miyazaki Gorô, *Kokuriko zaka kara (*From the Red Poppy Hill)” (Studio Gibli, 2011), *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, vol. 12, issue 3, February 2013 (査読無).

6. Rie Kido Askew, “The Politics of Nostalgia in *Vestiges of Japan*: Yamada Taichi's Representation of Lafcadio Hearn”, *New Zealand Journal of Asian Studies*, vol. 14, no. 1, June 2012, pp. 87-103 (査読有).

7. Rie Kido Askew, “Book review of Urs App, *The Birth of Orientalism*” (Philadelphia: University of Pennsylvania Press), *Asian Studies*, vol. 36, issue 2, June 2012, pp. 303-305 (査読無).

8. Rie Kido Askew, “The Morality of ‘Run, Melos!’”, *Asia Pacific World*, vol. 3, no. 1, Spring 2012, pp. 57-71 (査読有).

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1) 研究代表者

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・講師

アスキュー　里枝（ASKEW, Rie）

研究者番号：１０５９９６３２

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：